

〔論 文〕

(続)中国古文献に見える沈香について (上)

—その木と名称—

高 橋 庸 一 郎

はじめに

この小論は「阪南論集二十四—」中国古文献に見える沈香についてに続くものである。前稿では沈香が歴史的に如何に扱われて来たか、その香自身と薬効について歴史的な認識はどのようなものであったかを論じた。この小論では、加えてそもそも沈香の木とはいかなるものであるのか、またいかなるものとして認識されて来たかを明かにしていきたい。

一、沈香の木について

抑々沈香とはいかなる樹木から何如様にして採取されるものであるかを歴史文献の中から拾って見よう。《梁書・林邑國傳》に、
其國有金山、石皆赤色、其中生金。金夜則出飛、狀如螢火。又

(続)中国古文献に見える沈香について(上)

出瑤瑱、貝齒、吉貝、沉香。吉貝者、樹名也。其華成時如鵝毳、抽其緒紡之以作布、潔白與紵布不殊、亦染成五色、織爲斑布也。沉香、土人斫斷之、積以歲年、朽爛而心節獨在、置水則沉、故曰沉香、次不沉不浮者、曰穩香也。

其の國に金山有り、石は皆な赤色、其の中に金生ず。金は夜則ち出でて飛ぶ、狀螢火の如し。又瑤瑱、貝齒、吉貝、沉香出ず。吉貝なる者は樹の名也。其の華成りし時鵝毳の如し、其の緒を抽し之を紡ぎて以つて布を作る。潔白なること紵布と殊ならず、亦た染めて五色と成し、織りて斑布を爲る也。沉香なる者は、土人斫りて之を斷ち、積むに歳年を以つてし、朽爛して(而)心節獨り在るのみ、水中に置けば則ち沉む、故に名づけて沉香と曰う。次いで沉まず浮かざる者は穩香と曰う也。

とある。林邑國とは同書に、

林邑國者、本漢日南郡象林縣、古越裳之界也。伏波將軍馬援開漢南境、置此縣。

林邑國なる者は、本、漢の日南郡象林縣、古之越裳の界也。伏波の將軍馬援が漢の南の境を開いて、此の縣を置く。

とある。古越裳は恐らく六朝期の越常のことであろうと思われる。その地は交州（現在の河内）の南方約三三〇キロメートルの所であった。《古今圖書集成・木香部》に「蘇頌」を引いて

沈香出海南諸國及交廣崖州

沈香は海南の諸國及び交、広、崖州に出ず

とするから現在の北ベトナム附近が当時の沈香の産出地であったのである。この林邑國が沉香の大生産地であったということは、

《太平御覽、香部》所引の「杜寶大業拾遺録」に

四年夏四月征林邑國兵還至獲彼國得雜香真檀象牙百餘万斤沉香二千餘斤

四年、夏四月、林邑國を征す。兵還するに彼の國を獲するに至りて、雜香、真檀、象牙百餘万斤、沉香二千餘斤を得る

とある所からみても解る。

また沈懷遠の「南越志」に、

交趾密香樹、彼人取之、先斷其積年老木根、經年、其外皮幹俱朽爛、木心與枝節不壞、堅黑沈水者、即沉香也、其幹爲棧香、根爲黃熟香、

交趾の密香樹は、彼の人之を取り、先づ其の積年の老木の根を斷ち、年を経て、其の外皮、幹俱に朽爛するも木心と枝節とは壞せず。堅く黒く水に沈む者は即ち沈水也。其の幹は棧香と爲り、根は黃熟香と爲る。

とある。また同じく《太平御覽・香部》所引の、「南州異物志」には、

沈木香出日南欲取當先斫壞樹着地積久外皮朽爛其心至堅者置水則沉名沈香其次在心白之間不甚堅精置之水中不沈不浮與水面平者名曰棧其最小麓白者名曰繫香

沈木香は日南に出ず。取らんと欲せば、當に先づ斫りて樹を壞し、地に着せしめて積むこと久しくす。外皮朽爛して其の心に至れば、堅きは水に置けば則ち沈む。沉香と名づく。其の次は心の白き間に在りて、甚しくは堅精ならず。これを水中に置ても沈まず浮かばず。水面と平らかなる者は、名づけて棧香と曰い、其の最も小にして麓く白き者は、名づけて繫香と曰う。

とある。繫香というのはあまり聞きなれない呼称であるが、これは「本草綱目木部・沉香」の集解にいう、

恭曰沉香、青桂、鷄骨、馬蹄、煎香、同是一樹、出天竺諸國

恭曰く、沉香、青桂、鷄骨、馬蹄、煎香は同に是れ一樹なり、天竺諸國に出ず。

の、発音の類似から「鷄骨」に当るのであろうか。また同じく

《太平御覽・香部》所引の、『竺法眞登羅山疏』に、

沉香葉似冬樹形崇竦其木枯折外皮朽爛内乃香山雖有此樹而非香
所出新會高涼土人斫之經年內爛盡心則爲沉香出北景縣樹極高大土
人伐之纍年須外皮消盡乃割心得香

沉香の葉は冬樹に似たり。形は崇く竦えて、其の木枯れ折れ、外皮
朽爛すれば、内則ち香なり。山に此の樹有ると雖ども(而)香出づる
所に非ず。新會高涼たり。土人之を斫り、年を経れば内爛し盡し、心
は則ち沉香と爲る。北景縣に出で、樹は極めて高く大なり、土人之を
伐り、年を纍ぬれば、外皮消え盡くす須し。乃ち心を割りて香を得る
なり。

とある。また葉庭珪の『香譜』は、『証類本草』を引用して、

沉香其木類捺多節取之先斷其木根積年皮幹俱朽心與節不壞者香
也細枝緊一實爲青桂香黑而沉水者沉香半浮沉者爲鷄骨香最粗者爲
箋香

沉香、其の木類は棒に節多し、之を取るには先づ其の木根を斷ち、
年を積みて皮、幹俱に朽す。心と節と壞れざる者は香也。細枝緊一に
して實なるものを青桂香と爲す。黒くて水に沉する者を沉香と爲し、
半ば浮きて沉する者を鷄骨香と爲し、最も粗らき者を箋香と爲す。

とある。

以上『林邑國傳』『南越志』『南州異物志』『竺法眞登羅山疏』『香
譜』の五書の記述にはいづれも共通した点がある。

一、土人(彼人)がそれを斫り倒して長年に亘って放置しておく

(続)中国古文献に見える沈香について(上)

と、

二、やがて外皮や幹の外側が朽ち果てて、心の部分や節の部分だ
けが残り、それが香である。

以上の如くその内容ばかりでなく表現に用いられている言葉も、
「土人斫断之」「積年」「累年」「積以歳年」「経年」「積久」「朽爛」
「外皮」など共通しているものが多い。こうした表現の共通性は恐
らくこれ等の記述の基となったものが同一の書から出ているとい
ことを意味しているであろう。それは記述の最も簡潔で当を得てい
ると思われる『梁書』がその基の形で、他はそれが色々敷衍された
ものであるかもしれない。「斫」という動詞は『説文解字』では、

「撃也」とされ相当強い力を以つて扱ふ所作である。また「積年老
木」「経年、内爛盡」などという表現を見ても、この沉香木とい
うものは可成りの巨木であるということが解る。『竺法眞登羅山疏』
には、「樹高大、形崇竦」ともある。しかしにもかかわらず、「経
年、内爛盡」であるからその木は極めてもろいものであったら
う。大谷光瑞はその書『濯足堂漫筆』の中で沉香について

百尺に達する常緑喬木なり。樹身は白色輕鬆にして、毫も香気
なく、既に要材にあらず、殆んど薪材の用だも爲さず。

としている。前掲五書の記述から推して肯首出来るものであ
る。

とすると《太平御覽・香部山》に引く『杜寶大業拾遺録』に

尚書令楊素大業中東都宅造沈香堂甚精麗新泥堂訖閉之三月後開
視四壁並爲新血所洒腥氣觸

尚書令の楊素、大業中東都の宅に沉香の堂を造る。甚だ精麗にして新泥、堂訖りて之を閉じ、三月の後開きて四壁を覗るに、並に新血の洒する所と爲り、腥氣、人に觸る。

とあったり、また『事文類聚續集・卷十二』に、

唐敬宗時波斯進沉香亭子材拾遺李漢諫曰沉香爲亭何異瑤臺瓊室

唐の敬宗の時、波斯、沉香亭子の材を進る。拾遺李漢、諫めて曰く、沉香にて亭を爲るは、何ぞ瑤臺、瓊室と異らむ。

とあり、また『天寶遺事』には、

楊國忠嘗用沉香爲閣以檀香爲欄檻以麝香乳香節土和爲泥飾閣壁每於春時木芍藥盛開之際聚賓於此閣上賞花焉禁中沉香之亭殆不侔此壯麗也

楊國忠嘗つて沉香を用つて閣を爲り、檀香を以つて欄檻を爲り、沉香、乳香を以つて和して泥となし、閣壁を飾る。毎に春時に於て、木芍藥盛に開くの際、賓を此の閣の上に聚して、花を賞す。禁中沉香の始めなり。この壯麗に侔しからず。

とある。またこれもやはり『太平御覽、香部』所引の『異苑』に、沙門支法存在廣州有八尺氈氍又有沉香八尺板床太元中王琰爲州大兒劬求二物不得乃殺而籍焉

沙門支法、廣州に存在しとき、八尺の氈氍(毛織りの敷き物)有り。

又沉香の八尺の板床有り。太元中、王琰、州の大兒劬と爲りて二物を求むれど得ず。乃ち殺して(而)籍すなり(焉)

とある。これ等の記述は前掲五書に見た、沉香木の脆くて朽ちやすく、また大谷光瑞が言うように、要材ではなく、薪材の用にもなり得ないような雑材のイメージではなく、堂をつくり、閣をつくり、亭をつくり得るような八尺の板床にもなるような至極立派な建築上の用材でもあることになっている。更に、『太平廣記・香薬』所引の『國史纂異』に、

唐太宗問高州首領馮盎云卿宅去沉香遠近對曰宅左右即出香樹然其生者無香唯朽者始香矣

唐の太宗、高州の首領馮盎に問いて云く、卿が宅、沉香を去ること遠近なるか。對えて曰く、宅の左右、即ち香樹出ず。然るにその生なる者は香無く、唯だ朽する者にして始めて香りす。

とあり、生木は香がないというから例え建築用材として使われたとしても香木としての価値を発揮することはなく意味がないということになるし、ならばとて腐朽の材を使う筈もあるまい。なぜこのような記述上の相違矛盾があらわれるのであろうか。それは恐らく、『杜寶大業拾遺録』、『事文類聚續集』、『天寶遺事』、『異苑』などに見える記述は、沉香の木を他の香木用材と混同しているからではなからうか。沉香は光瑞が『濯足堂漫筆』の中で、

(沈香の) 香料は樹幹、枝樹等に脂状を呈し、暗色の凝結をな

し存在せり。蓋し樹の病より生ずる偶然のものなれば、全木に一片も発見せざること稀なりとせず

と言う如く、樹に生じる疾病によって結成されるようなものであって、本来一木から極く少量採取されるものようである。しかもまた光瑞が言うごとく

蓋し沈香は、之を燃焼して香氣始めて高し。燃焼せざれば香なきにもあらざるも、著しからず。

である。よって郭子横『洞冥記』の、

薰木鮮祇所獻色如玉而質輕泛之昆盧池爲舟爛則沈矣碎其屑氣聞數百里氣之所至毒疫皆除

薰木は鮮祇の獻する所なり。色は玉の如くして質は輕し。之を昆盧の池に浮かべて舟を爲り、爛すれば則ち沈むなり。其の屑を碎けば、氣は數百里に聞こゆ。氣の至る所、毒疫皆除かる。

というような記述も、恐らくこれは明記はしていないが沈香のことを言っているものと思われるが、「氣聞數百里、氣之所至毒疫皆除」は些か大袈裟な表現であるとしても、沈香は焼かねば香があまり出ないのであるから、これもやはり他の別の香木と混同しているのではなからうか。

二、沈香の異種について

(一) 沈香自身の異称

沈香が他の香と混同されるに至った原因の一つは、沈香につけら

(続)中国古文献に見える沈香について(上)

れたあまりに多いその異称によるものと考えられる。先づ沈香そのものについての異称は『本草綱目』に、

時珍曰木之心節置水則沉、故名沉水、亦曰水沈。半沉者爲椶香、不沉者爲黃熟香。南越志言交州人稱爲蜜香、謂其氣如蜜脾也。梵書名阿迦囉香。

時珍曰く、木の心節を水に置けば則ち沈む、故に沉水と名づく、亦た水沈とも曰う。半ば沈む者を椶香と爲し、沉まる者を黃熟香と爲す。南越志に言う、交州人は稱して蜜香と爲す。其の氣蜜脾の如きなり。梵書に阿迦囉香と名づく。

また〔集解〕に

恭曰沉香、青桂、鷄骨、馬蹄、煎香、同是一樹、

恭曰く沉香、青桂、鷄骨、馬蹄、煎香、同是一樹にして天竺諸國に出ず

とある。また前掲『南越志』には、

堅黑沉水者、即沉香也。半浮半沉與水面平者、爲鷄骨香。細枝緊實未爛者、爲青桂香。其幹爲椶香、其根爲黃熟香。其根節而大者、爲馬蹄香。此天物同出一樹、有精粗之異爾、并采無時。

とある。また劉恂の『表録異』には、

沉香、鷄骨、黃熟、椶香雖是一樹、而根、幹、枝、節、各有分別也。

沉香、鷄骨、黄熟、棧香は是れ一樹と雖ども、根、幹、枝、節、各々分別有る也。

とあり、また同じく『綱目』の『集解』に、「宗奭曰」として、

蓋木得水方結、多在折枝枯幹中、或爲沉、或爲煎、或爲黄熟、或爲鷄死者、謂之水盤香。

蓋し、木は水を得て方に結す。多くは折枝枯幹の中に在り、或いは沉と爲り、或いは煎と爲り、或いは黄熟となる。自から枯死したる者は、これを水盤香と謂う。

とある。またつづけて、

南恩、高、寶等州、惟産生結香。蓋山民入山、以刀斫曲幹斜枝成坎、經年得雨水浸漬、遂結成香。乃鋸取之、刮去白木、其香結爲斑点、名鷄斑、燔之極清烈。香之良者、惟在琼、崖等州、俗謂之角沉、黄沉、乃枯木得者、宜入藥用。依木皮而結者、謂青桂、氣尤清。在土中歲久、不得剝剔而成薄片者、謂之龍鱗。削之自卷、咀之柔勁者、謂之黄蠟沉、尤難得也。

南恩、高、寶等の州はただ結香を産生するのみ。蓋し山民山に入り、刀を以つて曲れる幹、斜なる枝を斫り、坎と成し、年を経て雨水の浸漬するを得れば、遂に香を結成す。乃ち鋸にて之を取り、白木を刮り去れば、其の香結して斑点と爲る。鷄斑と名づく、之を燔せば極めて清烈なり。香の良なる者は、惟だ琼、崖等の州に在り。俗に之を角沉、黄沉と謂い、乃ち枯木にて得る者は、宜しく藥に入れて用うべし。木皮に依りて結する者は、之を青桂と謂い、氣尤も清し。土中

に在りて歳久しくして剝剔を待たずして薄片と成つた者は、之を龍鱗と謂い、之を削りて自から巻き、之を咀して柔勁にし者は、之を黄蠟沉と謂い、尤も得難き也。

といい、また『承曰』として

諸品之外、又有龍鱗、麻葉、竹葉之類、不止二十品。要之入葉惟取中實沉水者。或沉水而有中心空者、則是鷄骨。謂中有朽路、如鷄骨中血眼也。

諸品の外に又龍鱗、麻葉、竹葉之類有りて二十品に止らず。之を要して葉に入れるは惟れ中實の沉水なる者を取る。或いは沉水にして中心の空なる有る者は則ち是れ鷄骨なり、中に朽路有ると謂うは、鷄骨中の血眼の如き也。

(以上傍線、波線は筆者による)

とある。こうして見ると一木から産する香も実に様々な呼称が与えられているということが解る。傍線を施したものがその名称で、波線を施した所がその他の名称のものとの相異を表わした部分であるが、例えば青桂香をみると、『南越志』では、「細枝緊實未爛者、爲青桂香」とあるが、『宗奭』では、「依木皮而結者、謂青桂」とする。また『南越志』では、「半浮半沉與水面平者、爲鷄骨香」とするのに対し、『宗奭』では、「或沈水而有中心空者、則是鷄骨」とする。つまり名称も、またその定義も書により人によりまちまちであったらしい。『本草綱目』に李時珍が多くの名称の整理を行っているので、少々長くなるが掲げておこう。

沉香品類、諸説頗詳。今考楊億談苑、蔡絳叢談、范成大桂海志、

張師倦游録、洪駒父香譜、葉廷珪香錄諸書、撮其未盡者補之云。香之等凡三、曰沉、曰棧、曰黃熟是也。沉香入水即沉、其品凡四、曰熟結、乃膏脈凝結自朽出者、曰生結、乃刀斧伐仆、膏脈結聚者、曰脱落、乃因水朽而結者、曰蟲漏、乃因蠹隙而結者。生結爲上、熟脱次之。堅黑爲上、黄色次之。角沉黑潤、黃沉黃潤、蠟沉柔黝、革沉紋橫、皆上品也。海島所出、有如石杵如肘如拳、如鳳雀龜蛇、雲氣人物。及海南馬蹄、牛頭、燕口、繭栗、竹葉、芝菌、梭子、附子等香、皆因形命名爾。其棧香入水浮半沉、即沉香之半結連木者、或作煎香、香名婆木香、亦曰弄水香。其類有猬刺香、鷄骨香、葉子香、皆因形而名。有大如笠者、爲蓬萊香。有如山石枯槎者、爲光香。入葉皆次于沉香。其黃熟香、即香之輕虛者、俗訛爲速香是矣。有生速、斫伐而取者。有熟速、腐朽而取者。其大而可雕刻者、謂之水盤頭。并不堪入藥、但可焚熱。葉廷珪云、出渤泥、占城、真臘者、謂之香沉、亦曰舶沉、曰菓沉、醫家多用之、以真臘爲上。蔡絳云、占城不若真臘、真臘不若海南黎峒。黎峒又以萬安黎母山東峒者、冠絕天下、謂之海南沉、一片萬錢。海北高、化諸州者、皆棧香爾。范成大云、黎峒出者名土沉香、或曰崖香。雖薄如紙者、入水亦沉。萬安在島東、鐘朝陽之氣、故香尤醞藉、土人亦自難得。舶沉香多腥烈、尾烟必焦。交趾海北之香、聚于欽州、謂之欽香、氣尤酷烈。南人不甚重之、惟以入藥。

沉香の品類は諸説頗る詳かなり。今、楊億の談苑、蔡絳の叢談、范成大の桂海志、張師正の倦游録、洪駒父の香譜、葉廷珪の香錄諸書を考へ、其の未だ盡くさざるものを撮りて之を補ひて云う。香の等は凡

(続)中国古文献に見える沈香について(上)

そ三あり、曰く沉、曰く棧、曰く黄熟是れ也。沉香は水に入れば即ち沉む。其の品は凡そ四あり。曰く熟結、乃ち膏脈凝結して自から朽ち出づる者なり、曰く生結、乃ち刀斧にて伐り仆し、膏脈結聚せる者なり。曰く脱落、乃ち水朽するに因りて結する者なり。曰く蟲漏、乃ち蠹隙に因りて結する者なり。生結を上と爲し、熟脱は之に次ぐ。堅黒を上と爲し、黄色は之に次ぐ。角沉は黒く潤い、黄黒は黄ろく潤い、臘沉は柔黝にして、革沉は紋横なり。皆上品也。海島に出づるに石杵の如き有り、肘の如く、拳の如く、鳳雀龜蛇、雲氣人物の如し。海南の馬蹄、牛頭、燕口、繭栗、竹葉、芝菌、梭子、附子等の香に及べば、皆形に因りて名を命す爾。其の棧香は水に入れるに半ば浮き半ば沉み、即ち沉香の半ば木に結連する者なり。或いは煎香と作り、香は婆木香と名づく。亦た弄水香と曰う。其の類で猬刺香、鷄骨香、葉子香有り。皆形に因りて名づく。大きなこと笠の如き者有り、蓬萊香と爲す。山石の枯槎なるもの如きもの有り、光香と爲す。菓に入るに皆沉香に次ぐ。其の黄熟香は即ち香の輕虚なる者にて、俗に訛して速香と爲すは是れなり。生ずること速くして斫伐して取者有り。熟する速くして腐朽して取る者有り。其の大にして雕刻す可き者は、之を水盤頭と謂う。并に藥に入るに堪えず、但だ焚熱す可きなり。葉廷珪云く。渤泥、占城、真臘に出づる者は、之を香沉と謂う。亦た舶沉と曰う。菓沉と曰う。醫家多く之を用う。真臘を以て上と爲す。蔡絳云く、占城は真臘に若かず、真臘は海南黎峒に若かず。黎峒は又萬安、黎母山、峒東のものを以てして、天下に冠絶して、之を海南峒と謂う。一片萬錢なり。海北の高、化諸州の者は、皆棧香爾。范成大云く、黎峒より出づる者は、土沉香と名づく、或いは崖香と曰う。薄きこと紙の如しと雖えども水に入れば亦た沉む。萬安は島東に在り。鐘は陽の氣に朝す。故に香は尤も醞藉なり。土人亦た自から得難し。舶沉香は多く腥烈にして尾煙は必ず焦たり。交趾海北の香は欽州に聚す。之を欽香と謂う。は氣尤も酷烈なり。南人甚しくは之を重ぜず、惟れ以て藥に入るなり。

(二) 沉香に係わる香の異称

『本草綱目』では沉香の〔釋名〕の項に、沉水香、蜜香と擧げ、また蜜香は別項を立てている。そしてこの蜜香の項の〔釋名〕には、木蜜、没香、多香木、阿隣としている。〔集解〕には、

藏器曰く、蜜香生交州。大樹、節如沉香。法華經注云、木蜜、香蜜也。樹形似槐而香、伐之五六年、乃取其香。異物志云、其葉如椿。樹生千歲、斫仆之、四五歲乃往看、已腐敗、惟中節堅貞者是香。

藏器曰く、蜜香は交州に生ず。大樹にして、節は沉香の如し。法華經注に云く、木蜜は香蜜也。樹の形は槐に似て香あり、之を伐りて五六年、乃ち其の香を取る。異物志に云く、其の葉は椿の如し。樹生じて千歲なるもの、之を斫り仆して、四五歲にして乃ち往きて看るに、已に腐敗し、惟の中の節堅貞なる者はれ香なり。

とある。以上の点から見ると蜜香というのはその樹形、採取の仕方、及びその部位の情況などが殆んど沉香と同じことが解る。それに〔集解〕には更に続けて、

珣曰、生海南山中。種之五六年便有香。交州記云、樹似沉香無異也。

珣曰く、海南山中に生ず。之を種えて五六年にして便ち香有り。交州記に云く、樹は沉香に似て異なる無し也。

とある。ここでは、「樹似沉香無異也」とまで言っており、これは蜜香と沉香とは同じものであると言ってもさしつかえないように

思われる。しかし李時珍は慎重に、

按魏王花木志云、木蜜號千歲樹、根本甚大、伐之四五歲、取不腐者爲香、觀此、則陳藏器所謂生千歲乃斫者、蓋誤訛也。段成式西陽雜俎云、没樹出波斯國、佛林國人呼爲阿隣。(中略) 廣州志云、肇慶新興縣出多香木、俗名蜜香。(中略) 晉書云、太康五年、大秦國獻蜜香樹皮紙、微褐色、有紋如魚子、極香而堅韌。觀此數說、則蜜香亦沉香之類、故形狀功用兩相彷彿。南越志謂交人稱次香爲蜜香。交州志謂蜜香似沉香。岭表録異言棧香皮紙似魚子。尤可互証。

按ずるに魏王の花木志に云く、木蜜は千歲樹と號す。根本は甚だ大なり、之を伐りて五四歲にして、腐せざる者を取りて香と爲す。此を觀るに、則ち陳藏器の所謂「生千歲乃斫」というのは蓋し誤訛也。段成式の西陽雜俎に云く、没樹は波斯國に出ず、佛林國人は呼びて阿隣と爲す。(中略) 廣州志に云く、肇慶新興縣に多香木出ず。俗に蜜香と名づく。(中略) 晉書に云く、太康五年、大秦國蜜香樹皮紙を獻す。微褐色、紋の魚子の如き有り。極めて香しく堅韌なり、此の數説を見るに則ち蜜香は亦た沉香の類なり。故に形狀功用兩つながら相い彷彿たり。南越志に交人沉香を稱して蜜香と爲すと謂う。交州志に蜜香は沉香に似たりと謂う。岭表録異に棧香皮紙は魚子に似たりと云う。尤も互いに証とす可きなり。

と述べている。時珍は沉香と蜜香が全く同じものであるとは断定していないように読みとれる。しかし同類のものであると言っている。それが『本草綱目』に蜜香という項目を独立して設けた理由にもなっている。(以下次号) (一九八八年七月十五日受理)